

美術の窓(24)

北斎の「人間世界」

大和文華館館長 吉川 逸 治

すでに半世紀あまり経ったが、パリ遊学中、わが師アンリ・フォション先生は、いく度か力強い語調で、「北斎の人間世界」といわれて、北斎の芸術を激賞した言葉が、いまだに耳の奥に響をとどめ、折折、先生の言葉に喚びさまされ、この北斎の人類をめぐって、語られたことを思い出し、また我流に解釈して、ここに綴って見よう。

先生は「48年の人間」とか、「ドームエの人類」、「ゾラの人類」、あるいは「バルザックの世界」という言葉を用いて、力強く社会に生き、独創的な見識で、自分の生きる人間社会に広く自分を投射しながら、創作活動のうちに多種多様に身近かな人間社会を拡大し、自分の芸術的人間世界を作り上げる、自分の「人類」を創造する芸術家を好んで語り、また芸術家のこのような人類創造の側面を浮彫りにして、講義され、談話されるのを好まれた。作者は、自分の生きる社会を愛し、社会の真実を捉え、描写し、暴露し、批判し、貧しく虐げられた人々は愛情をもって、ともによりよき世界への理想に燃え、作家の真実への情熱とその悪に対する批判、人類愛への奉仕といった1848年革命以来のフランス共和国を熱狂させた理想社会への情熱のうちに育てられた先生は、美術史の講義でも、画家の社会的役割について、積極的に関心を示された。

先生が、北斎について、激賞さ

れる折は、単に版画の世界的大家として語るのではなく、19世紀世界の社会的、歴史的展望のうちに北斎を位置づけ、北斎の版画芸術を根底において終始支持してきたものが、真実の観察に基づいた批判的精神であり、それが彼の身近かな人間社会と密着しているところに、19世紀フランスの画家、作家たちと通ずるところのあることを洞察されて居られたと思う。日本の18世紀末から19世紀初め、西欧の遅れた国々より進歩していたと見て居られた。

北斎の目標は、長い生涯を通じ、自分の眼で見た「真実」を描くことで、貧しい少年北斎は本屋の小僧として育ちながら、読本類を通じ、人生の夢から、人間社会の闘争、世界の背後から人類の運命を操る天の理、悪魔の計略など、さまざまの人間社会への豊かな好奇心を育てあげると同時に、言葉を画像にする天分を感じ、画を学ぶため発心して、いろいろの先生から画法を学ぶ。

庶民に身近かな浮世絵師から学ぶ遊里の男女の仮世界より、実社会の生活、自然の実景へと興味を進め、写実主義の狩野派に本格的な画法を学ぶ。同時に読本の挿絵の描手として働き、筆は寸時も休まず、人物動作、表情は観察が欠ければ真実に見えず、時に、折よく、オランダ流の絵画法が江戸の市中にも知られ、北斎は熱心に、

浮絵より根本的にオランダ流の絵画の特質に捉えられる。先輩たちより粗っぽいのが、明暗調を単純で効果的に使って、物体の形像に厚味、重味をあたえ、遠近法が力強く風景を形成させる。細密な写実より却って、市中に生きる人々には、実感を与え、同時に一種のユーモアを感じさせる。このユーモアが北斎の厳しいデッサンにいつも、心のゆとりをささげける。この頃、彼は幾何学図形の製作法を識って、その重要なことを痛感し、これからは彼の構図には必ず、垂直線、三角形、円形などが、画面の構成要素として働き、画中に道理の秩序を感じさせる。これが彼の構図に知的整頓をささげける。

北斎は、この幾何学図形を用いて、簡単な人物略画法をあらわし、ユーモアたっぷり、デッサン法を教える。心の余裕が北斎の精神が自由に働くことを助け、彼の着想は奇抜、奇想、しかもデッサンの着実さはものの真相を捉えて逃がさぬ。富嶽三十六景の四十六図は、どれを見ても、新鮮味に溢れ、しかも市中でも、田野でも、山中でも、河川、海、浜、どこにも、活発に働く人々が自信に満ちた仕事にいそんでいる。仕事が楽しみであり、誇りでもある。これが北斎の人物のこれまでの風俗画や屏風画の画家の人物像とちがうところで、北斎の人物は、各自の意識が表情に態度に表われている。そ



弘法大師修法図 西新井大師蔵

して、富士山は朝夕、彼等と生活をともにしている。この点は、まん円いお天道様と同様である。生活の幾何学として、主宰している。しかし、北斎は厳しい富士、神々しい富士を描いて、人間をよせつけない、人間社会の変遷、善悪に超然たる富嶽を添えることを忘れない。自然の代表、天道の代表として。

世はまさに末世にあり、いつの時代でも。大小悪行は横行し、文学者、美術家はそれを口実に汚れた作品を発表の自由と称してかきまくる。北斎は末世に生き、溺れず、阿ねず、道にかなわぬ愛欲は畜生道に墮ることを図示し、享楽がさめれば相手は大ダコ、後代の西欧作者の小説に朝起きたら昆虫になっていたというのを思わせる。

北斎は好んで恐ろしいお化け、白骨人物を描く。その想像力はすぎましい。西新井大師の大作、弘法大師病魔退治の図もまさにこれら一連の怪奇世界の傑作。北斎は、ここで、天の理、人情、義理などを超絶した世界にいて、人類の高慢を警告する。経巻を両手にしかと握って念ずる弘法大師は、異様な姿の疫病の赤鬼の恫喝に耐えこらえる。恐ろしい狼犬も老樹に頼って咆吼するのみ。法が耐ゆるか、悪道が横行するか。北斎の「人類」はいかに。

季刊 美のたより No.80

昭和62年 8月 20日

発行 大和文華館